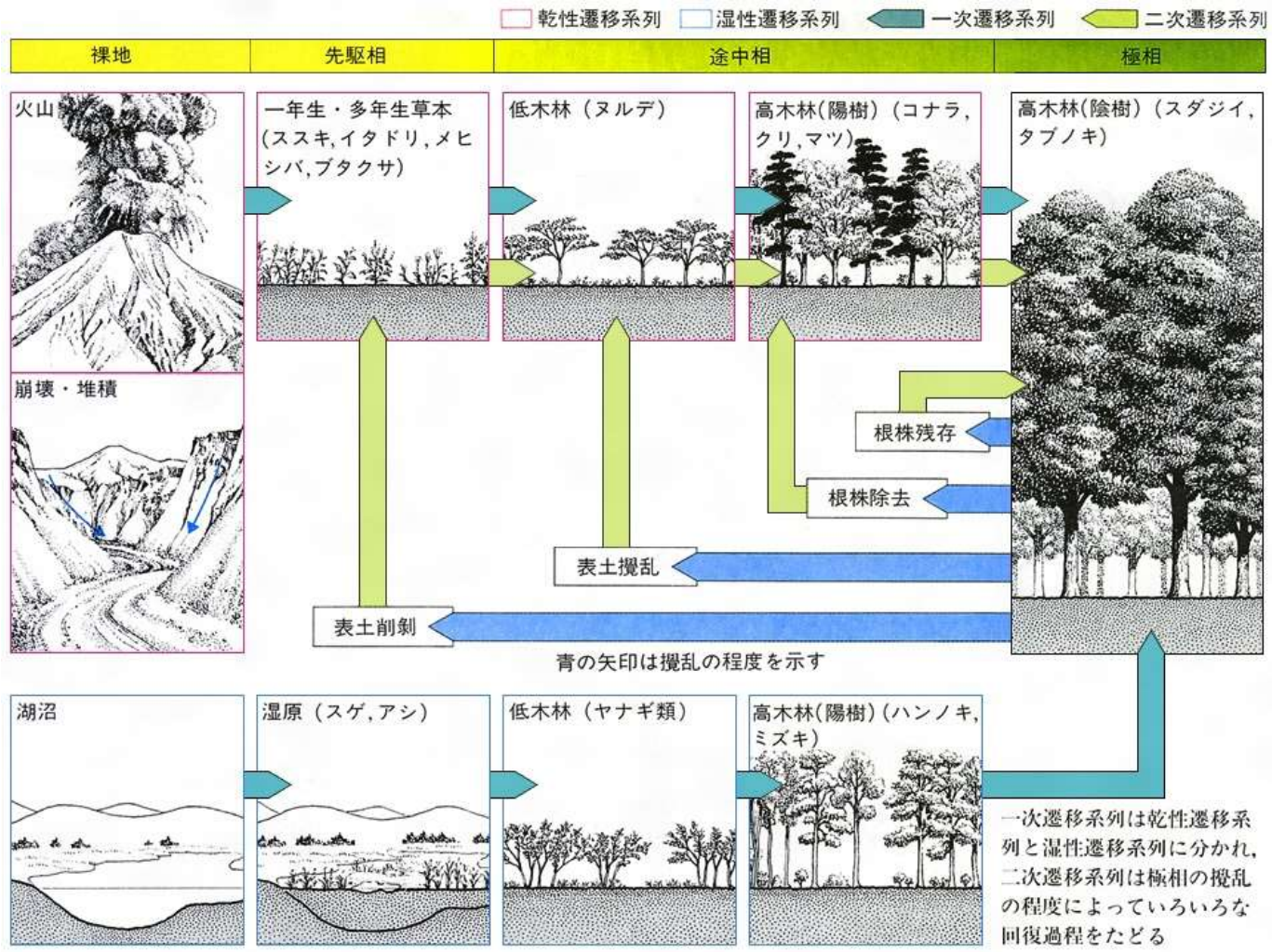
遷移　火山の噴火や土石流などにより、それまでにあった生物群集が一掃されて裸地になった場所は、永久に裸地のままとなっていることはまれで、多くの場合は地衣類や草本植物とそれらに依存する生物が入り、しばらくすると草原に、草原から低木林、低木林から高木林へと変化していく。このようにある場所に存在する群集が、時間の経過とともに次々に別の群集にかわり、最終的に比較的安定な状態（極相）へ向かって変化していくことを、**遷移**または**生態遷移、植生遷移**といい、変化の過程を遷移系列という。遷移は、その状態によっていくつかに区別されている。

〇遷移開始時の状態による区別

一次遷移系列：完全な裸地（溶岩上、新島･新岩礁など）すなわち基質に全く生物を含まない場所に新たに生物が進入してはじまるもの。

二次遷移系列：群集が破壊されたあとに生じ、最初から基質に若干の生物、例えば土壌中の種子･地下茎･切株･土壌動物などを含む場所からはじまるもの。



図の出典　小学館　日本大百科全書(ニッポニカ)　https://kotobank.jp/word/%E9%81%B7%E7%A7%BB-87965

○植生基質の乾湿の違いによる区別

乾生遷移系列（乾生系列）：一次遷移について、岩石地などからはじまるもの

湿生遷移系列（湿生系列）：湖沼などからはじまるもの

○遷移を引き起こす原動力による区別

自発的遷移：単に環境の変化に応じて群集の変化が進行するのではなく、生物群集が反作用によって環境を変化させ（環境形成作用）、その変化した環境が生物群集に作用して新たな生物群集が形成されるプロセスを繰り返して遷移系列が進行するもの。

※ 作用：環境から生物に影響を及ぼす（例：光が生物にあたり体温を上げる）

※ 反作用：生物が環境に影響を及ぼす（例：植物が酸素を放出し大気組成を変える）

他発的遷移：生物による環境形成作用がほとんどあるいは全くなく、環境の変化のみが原因となって群集あるいは生物相の変化が進行するもの。例：浸蝕による川の流速・流量・水深の変化に伴う魚類相の変化。

退行的遷移：放牧や移入種による植生破壊が原因となって、通常とは逆に生物群集が退行するように進行するもの。

偏向遷移：恒常的な人為的影響などが原因となって、通常の遷移の系列からはずれ、特殊な生物群集が形成され遷移が停止してしまうもの。

極相　遷移の進行が止まり、群集が長期間安定を続ける状態を極相いう。同一の気候件・土壌条件であれば同一の極相に収斂（しゅうれん：ルーツの異なる現象や生物が時間の経過と共に似たような形質にまとまってくること）すると考えられている。日本本土の温帯域であれば通常、極相群落は森林（高木林）になる。低温･乾燥により森林が成立できない場所や海岸、高層湿原などでは荒原や草原が極相になる。沖縄ではタブノキを中心とした複相陽樹林が極相群落と考えられている。

極相は人為による撹乱ばかりでなく、自然の破壊力により絶えず大小の撹乱を受けているから、その修復過程も進行し、二次遷移途中相が極相の中に常にパッチ状に存在するのがむしろ自然の姿である。

海洋生態系では、生物による環境形成作用は存在するが、一般に遷移はみられない。海底に固着する海藻・海草の群落、またはサンゴ群集がいったん成立すると、ほぼ安定的に存在する。攪乱を受けて別の群集に変化することはあるが（レジームシフト）、それが連続して極相に向かうこともない。これは環境形成作用が、固着基盤や生息環境の大きな質的変化として現れないためである。